

三田まつり見直しに向けた提言

1 はじめに

令和元年度で41回の歴史を数え、三田の暑い夏を彩る三田まつりは、多くの市民に親しまれるまつりとして、また、花火見物を中心に、市内外から約75,000人(令和元年度)の参加のもと盛大に開催するなど、今や三田を代表する観光資源として定着してきた。

しかしながら、昨今の社会情勢の変化により、三田まつりの開催には様々な課題が顕在化している状況にある。とりわけ、花火の安全対策に係わる人手不足に起因する全国的な人件費の急騰による警備費の増嵩は、事業費の増大を招く結果となり、このことは市補助金に加えて、市民や企業の皆様からの募金や協賛金によって支えられている三田まつりの存続に関わる大きな課題であり、抜本的な対策を講じる必要がある。

当会議(三田まつり見直しに向けた企画検討会議をいう。以下同じ。)は、三田まつりを取り巻く諸課題について議論し、その結果を今後の三田まつりの見直しに向けた企画や考え方としてとりまとめ、以下のとおり提言するものである。

2 三田まつりの現状

(1) 三田まつりの意義等

三田まつりは、そのテーマとして「心のかよう、ふるさと三田」を掲げ、市民のまつりとして、相互の交流と連帯の輪を広げるとともに、「わがまち三田」のふるさと意識の醸成を図ることを目的に、また、その意義には、①市民文化の伝承、②三田への「愛着」と「誇り」を育み、「わがまち三田」へのふるさと意識の醸成、③観光振興やシティセールスなど三田の魅力発信の推進、の3点を認識する中で、毎年8月第1土曜日に開催されてきた。

(2) 三田まつりを取り巻く諸課題

三田まつりを取り巻く現下の諸課題は、大別して次の3点が挙げられる。

ア 財源確保策

花火の安全対策に係る警備費の増嵩、持続可能な財政運営に向けた安定的な収入の確保、これら2点が大きなポイントである。とりわけ、令和元年度決算によると、総額16,716千円に対し、市補助金と広告等協賛金・募金で15,440千円と全体の92.4%を占めており、さらには、全体の約半分の財源を不確定要素の高い広告等協賛金や募金に依存しているのが実情であり、こうした点が大きな課題の一つである(末尾資料「第41回(令和元年度)三田まつり収支状況」参照)。

イ 実施内容

花火に特化したまつり内容であること、現在は新型コロナウイルス感染症の影響を受け厳しい状況に陥っているが、ウィズコロナ、アフターコロナの観点に立ち、新たな生活様式のもとで観光資源としての活用を検討すること、以上の2点が大きなポイントである。

ウ 実施体制

市民のまつりである三田まつりを様々な団体が協力し合い開催するとした考えのもと、多くの団体が実行委員会組織を構成しているが、そのことが一方で実行委員会組織の機動性の欠如を招いており、慣例により毎年度交代する実行委員長の職務執行者を含めた実行委員会体制の見直し・強化が、大きなポイントである。

3 今後の三田まつりの見直しに向けた企画や考え方

当会議は、上記2に掲げる3点の課題について議論した結果として、三田まつりの存続をその総意としたうえで、今の時代に即した三田まつりとなるよう、今後の三田まつりの企画や考え方として以下のとおりとりまとめ、今後新たに組織される三田まつり実行委員会にその具現化を委ねるものである。

(1) 財源確保策

ア 人員不足に起因した警備費の高騰など現下の三田まつりを取り巻く財政面での課題に対応し持続可能な運営を維持するためには、市の補助金に依存しない安定的な収入を継続的に確保する必要がある。

また、昨年までは、高騰する警備費用を捻出するため、支出の削減を中心に見直されてきたようであるが、他の自治体で開催される花火大会（長岡花火大会や世田谷区たまがわ花火大会）では広告収入や観覧席販売収入など安定的な収益が計上されており、市補助金のほか、企業協賛金や募金など不確定要素が高い収入で構成される三田まつりの財政構造とは大きく異なっている。加えて、両花火大会では、これらの収入を確保するに当たり、支出についても専門事業者による外部委託を導入することにより収益に還元される仕組みが構築されている。

したがって、今後の方向性としては、支出の削減には限界があることから、逆に支出を増やしたうえで収益を上げる視点のもとで検討する必要があるものとする。

当会議としては、こうした考えのもと、今の時代に即した三田まつりとなるよう、現行の協賛金や募金に加え、今後の財源確保策として次の各点を提案したい。

(ア) 広告収入

三田まつりの、①開催前（イベント情報が欲しい人向けのHPへのタイアップ広告掲載や告知チラシへの広告掲載など）、②開催当日（人通りの多い場所への広告看板の設置や郷の音ホール壁面への企業広告掲載など）、③開催後（三田まつり

終了後も継続使用が可能な広告の制作など)、の3段階に分けて募る。

(イ) 出店料 (マーケット収入)

プロと市民活動団体とは出店エリアを分けるなど、参加しやすい配慮を行う。

(ウ) アルコール・ソフトドリンクの独占販売

(エ) ステージイベントの出演料 (市民団体) 及びチケット収入 (プロのミュージシャンの公演)

(オ) 花火有料席

ドリンクサービスなど付加価値を付ける。

(カ) 公式グッズ販売 (文具、Tシャツなど)

(キ) 協賛金

Youtube 配信等を通じ、インターネットを活用して募集するなど、新たな情報発信の手法と合わせて検討されたい。

(ク) 以上のほか、クラウドファンディング (花火の応援購入など) も今の時代に即した有用な財源確保策であり、積極的に導入すべきである。

イ 上述のとおり、持続可能な財政運営を維持するためには、市の補助金に依存しない安定的な収入を継続的に確保する必要がある。

したがって、今後は、上記アの各点に掲げる財源確保策を講じつつ、収益や繰越金等の状況に応じて市の補助金を段階的に削減していけば良いのではないかと考える。

(2) 実施内容

ア 三田まつりの催し内容としては、上記2(1)に掲げる三田まつりの意義や目的に即した催しである現行の①花火、②総踊り (盆踊り)、③市民団体によるステージイベントについて見直すことと合わせ、現行の出店ブースを拡充させたフードフェスティバルの実施を提案したい。

(ア) フードフェスティバル

三田の特色である「食」を活かした観光資源として市内外からの来場者による賑わいを創出するものであり、他団体の企画イベントとの連携や秋に開催される既存イベントと統合して一体的に実施することを検討してはどうか。さらに、郷の音ホール付近のみならず、三田駅前を含め、点としてではなく、面的な賑わい創出を図ることで一層の盛り上がりが見込めるのではないかと期待できるのではないかと考える。

以上の試みは、時期を秋に変更して実施することを前提としているが、当会議としては、こうしたイベントのジョイント開催によるそれぞれが連携・協力し合う形は、経費削減と合わせ、観光資源としての賑わい創出や市の魅力発信、集客

アップによる経済効果の拡大を図ることができるものとする。

(イ) 花火

夏の風物詩として多くの方々に楽しまれる大きな観光資源であるが、第 41 回（令和元年度）三田まつり収支状況を見ると、決算額 16,195 千円に対し、「警備費」と「花火費」の合計が 11,417 千円と全体の 70.5%を占めており、この点からも現在の三田まつりは、実質的に花火に特化したまつり内容であると言える。

花火は、上記(1)による財源確保策を講じることによる安定的な財政運営のもとに実施されることが望ましいことは言うまでもないが、こうした経費の問題に加え、畦畔や家先での一部観覧者によるマナーの悪化により、一部地元地域の理解が得にくい状況にあると伺っている。

したがって、今後は、ウィズコロナ、アフターコロナの観点のもと、現状に捉わられることなく、様々な趣向を凝らした形で試行、検証を行うべきであり、その場合、実施内容や実施時期を変更することも選択肢の一つとして考える。

(ウ) 総踊り（盆踊り）

市民文化の伝承の機会として実施されているが、近年の参加状況を見た場合、盆踊りだけではなく、若者も参加しやすい内容を取り入れ、参加しやすい雰囲気を出することで、結果的に盆踊りが楽しまれ普及することも考えられる。

一方で、団体への動員による参加者の負担増加などを思うと、誰もが負担に感じることなく、みんなが楽しめる踊りにしなければ広く浸透しないと思われる。

したがって、総踊りは、三田音頭の普及促進と同時に、三田音頭がふるさと三田の風物詩となるよう保存の観点を念頭に置く必要があると考える。

(エ) 郷の音ホール内でのステージイベント

現行の市民団体による発表の場として実施されているが、施設の有効活用と賑わい創出の観点から、プロのミュージシャンによる演出とセットで開催することで、活動披露の場と収益の双方の拡大を図ることができる。

イ 以上のほか、熱中症対策等を考慮しても、開催時期の変更は選択肢の一つであるとする。「夏まつり」のイメージが消えるという課題はあるが、熱中症対策経費の削減や食中毒など衛生面での不安軽減のほか、出店時間の拡大による更なる賑わいの創出といった開催時期の変更によるメリットを比較考慮しても、検討の余地は十分にあると思われる。

折しも、令和 3 年度は、夏に我が国で東京 2020 オリンピック・パラリンピックが開催されることから、試行的に実施内容や実施時期の変更を試みるのも良い機会と思われる。

(3) 実施体制

ア 新たな三田まつり実行委員会の実施体制については、各団体への説明や意見の聴取を踏まえたうえで検討するべきであることから、当会議としては、この場に参加していない他の団体の意向が分からない中で実施体制への参画の是非を議論することは適当ではないと考える。

そこで、毎年12月に実施されるサンタ×三田プロジェクトの実行委員会組織を参考として、市民、ボランティア、団体、事業者など様々な客体の関わりを大切に組織の輪を拡大させることを提案したい。

【サンタ×三田プロジェクト】

実行委員会組織は、メインイベントなど核となる催しを主催する団体等で構成し、それ以外の団体は、実行委員会組織に加わらないが、当該プロジェクトに参加したい団体自らが催しを企画・実施して参画する運営方法で開催されている。

なお、持続可能な組織運営を行うためには、これまでのように市が主導で進めていくのではなく、市はあくまでも全体の調整を担うことに重きを置き、市民が主導で実施することが望ましいと考える。

イ また、当会議のメンバーも、当会議への参加が団体や個人の区別はあるが、この会議での議論を通じたつながりを大切にし、ここにとりまとめた今後の三田まつりの見直しに向けた提言の実現に向け、引き続き新たな実行委員会組織に参画し、あるいは実行委員会組織に参画しないまでも何らかの形で協力したいと考えている。

4 付帯企画

令和3年度の三田まつりについては、新型コロナウイルス感染症の動向等を勘案する必要があることに加え、夏に我が国で東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されることを踏まえ、この提言を具現化した令和4年度の本格実施に向け、その機運を高めるとともに、それに繋がるようなイベントを試行的に実施することを提案したい。

具体的には、夏には市役所風の広場で昔ながらの盆踊りを、踊りの演習はもとより、三田音頭の成り立ちや浴衣の着付けを合わせて実施することにより、世代間交流による伝統文化の伝承と普及を図る。

また、秋には郷の音ホールを中心にフードフェスティバルを、秋に開催される既存イベントと統合し、郷の音ホール付近のみならず三田駅前を含め一体的に実施する。これらに花火を組み合わせ、経費削減と合わせて、観光資源としての賑わい創出や市の魅力発信、集客アップによる経済効果の拡大を図る取り組みにチャレンジする。なお、花火は、打上場所等の変更や花火映像の投影など、財源確保の担保に加え、三密回避の観点

も考慮し、最も適切な方法を選択し実施する。

そして、こうした新たな試みの成果を検証し、さらなる拡充を図るとともに、市民をはじめとする参加者の反応等を見定めたいと、令和4年度以降、今の時代に即したより良い形での三田まつりの開催を望むものである。

令和2年12月23日

三田まつり見直しに向けた企画検討会議

【参考】

三田まつり見直しに向けた企画検討会議委員名簿

(50音順・敬称略・◎座長)

石出 正子	大西 宏昭	古家 良和	杉原 健吾
須田 聡子	◎西田 和明	服部 あかね	諸富 稜
山内 直也	油谷 章二		

【資料】

第41回（令和元年度）三田まつり収支状況

【収入】 (金額単位：千円)				【支出】 (金額単位：千円)			
	H30	R1 [Ⓐ]	差引額		H30	R1 [Ⓑ]	差引額
補助金	3,600	7,000	3,400	総務費	1,545	1,557	12
広告等協賛金	6,261	6,337	76	広告宣伝費	423	438	15
募金	1,092	2,103	1,011	警備費	6,262	7,342	1,080
マーケット収入	25	38	13	会場等設営費	3,081	2,720	▲361
雑入	0	0	0	イベント費	227	63	▲164
花火関連準備基金繰入	5,998	0	▲5,998	花火費	4,500	4,075	▲425
前年度繰越金	300	1,238	938	予備費	0	0	0
合計	17,276	16,716	▲560	合計	16,038	16,195	157

Ⓐ－Ⓑ＝521千円 ⇒ 翌年度繰越金